

2020年度アイデア・トレーニング・キャンプ 報告

アイデアトレーニングキャンプ (ITC) は、2020年度はコロナ禍により (Pandemic COVID-19) 5月開催はできなくなり、8月に延期された。年度開始の時期に感染症が広がり大学が全館閉鎖にもなり、大学に出て来れない留学生もいたり、連絡が取りにくくなった学生もいたので、5月中旬から8月5, 6, 7日に延期したのは妥当であったが、そのガイダンスとして5月13日午前11時からオンラインで (TEAMS テレビ会議システム利用) 行うことができた (5名程度の参加)。その後、TEAMS のチャットシステムに ITC の登録者全員を入れて連絡の共有を行ったところ、7月下旬にはすべての参加者との繋がりが可能となり、8月5日に最初の集合をかけることができた。

8月5日、第1日目は、午後1時から柳戸会館1階会議室において対面で開始したが、予定していた1名の留学生が出てこず別の予定されていない留学生が現れて参加してもらった。また、別の1名の留学生は日本に来られずケニヤからのリモート参加であった。結局、8名の対面参加と1名のリモート参加のもと、会議が始まった。最初に予定していた全体討論 (テーマは「AI時代における博士の能力とは何か?」) は、長時間の会話による飛沫拡散が危惧されたので中止とした。その代わりに、英語による個別の研究発表 (各5分間) から開始した。発表者は配布したフェイスシールドを付けて約5分間の研究概要発表を行い、その他の参加者は3つのグループに分かれてマスク着用しながら参加し、発表を聞いた後質疑応答も行った。各人の研究概要のプリントしたものは、各人用意し配布してもらっていた。各グループにはアクリル板を各1枚置いてマスク着用のもとで議論してもらった。8名発表が終了した後、リモートでケニヤから参加している留学生も TEAMS を使って画面共有により PPT 発表をプロジェクターで映し出して行うことができた。ただ、この時は会議室ではWiFi通信が使えないので参加者からスマホのテザリングを使うことを申し出てくれたので、それによってケニヤから TEAMS を使って発表に参加することができた。

全員の発表を聞いた後は、3つのグループ (A, B, C) に分かれて、各グループでどのテーマについてリファイン作業を行うか、についてその場で1時間程度議論を続けた。ほぼテーマが決定されて散会となり、続きの議論はオンライン (TEAMS 上で) のグループワークで行うことになった。

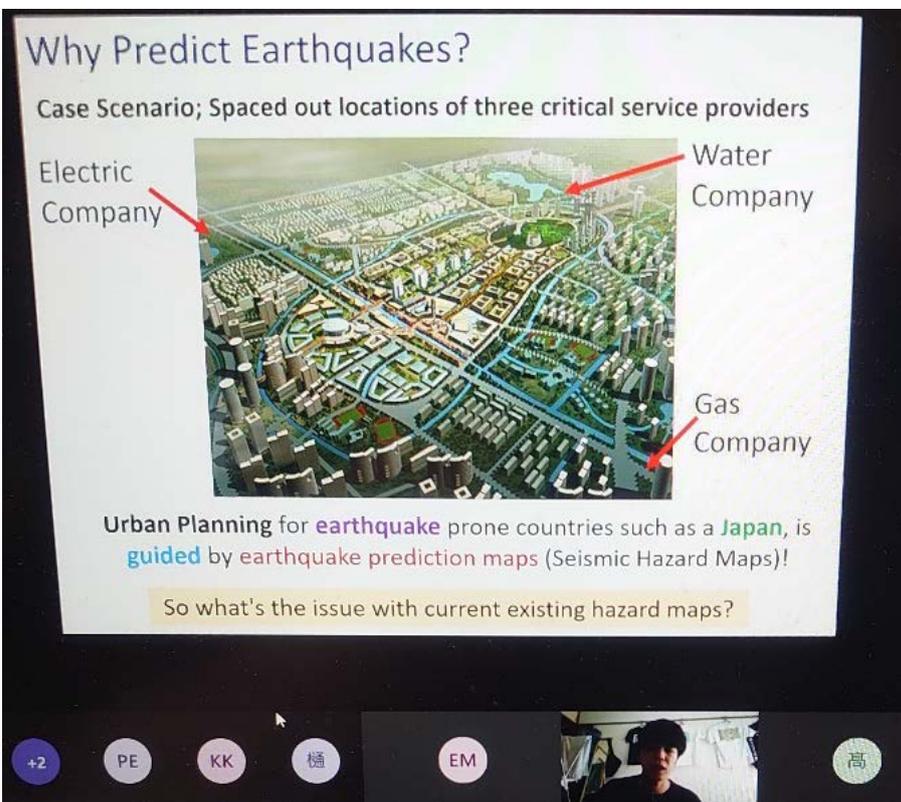
2日目は、グループごとのリファイン作業のグループワークを行うことになっていたが、翌日の6日から18日までグループごとのオンライン会議によっておこなった。各3人のグループになったが、選ばれたテーマの学生が発表資料などを TEAMS の各グループのチャットルームに上げて、他の学生が質問や修正提案などをチャット等によって示しながらリファイン作業が行われた。お盆休みを挟んで2週間ほどリファイン作業を続けてやってもらって、最終案 (12分発表用と3分発表用の2種類) の PPT ファイルを発表日 (19日) ま

でアップロードしてもらった。

3日目に当たる最終発表日は、19日(水)になったが、オンラインでTEAMSでの発表とした。最終発表として、各グループの担当者が12分用のPPT資料を画面共有で示しながら英語で発表をおこなった。3分間のPPTは、ナレーション付きパワーポデータは作ってもらっていたが、TEAMSのWeb会議の画面共有のやり方では音声だけ流れてこないという不具合があった(後で設定の問題であることが判明したが)ので、3分間PPTだけはTEAMSチャットルームにアップするだけにして、後で各人がダウンロードし確認することとした。発表終了後、ベストリファイン賞を選ぶための投票を行った(Google Formを利用;自分のグループ以外に投票する)結果、Bグループ(担当:高橋)が選ばれた。これで一応ITC2020は、終了となった。オンラインだったため、例年の集合写真は撮れなかった。(が、下にオンライン発表の様子をパソコン画面に出したので雰囲気は分かると思われる)

その後、このITCの応用行事として名古屋大学主催の「企業と博士人材の交流会」のWeb交流会(あるいは広島大学主催の3MTコンペ)に参加するときに必要な3分間程度の発表用PPTファイル作りのオンラインガイダンスをTEAMS上で行った。その結果、名古屋大学のWeb交流会に岐阜大学から2名が参加し、企業研究者と交流できた。また、広島大学が主催して行われる「3MTコンペティション」(11月、オンラインで)の案内を出して、ITCの参加者に3MTに参加するように呼びかけた。

リモート発表様子(パソコン画面)



The screenshot shows a presentation slide with the following content:

- Title:** Why Predict Earthquakes?
- Case Scenario:** Spaced out locations of three critical service providers
- Map:** A 3D city model with red arrows pointing to the locations of the Electric Company, Water Company, and Gas Company.
- Text:** Urban Planning for earthquake prone countries such as a Japan, is guided by earthquake prediction maps (Seismic Hazard Maps)!
- Question:** So what's the issue with current existing hazard maps?

At the bottom of the screen, there is a video conference interface with a grid of participant icons labeled +2, PE, KK, 樋, EM, and 高, and a small video window showing a person.